



1. 道具を持ったグループに集まり、交渉をする子どもたち / 2. 資料や道具を自ら準備して授業を行ってくれた小林さん / 3. 製造した製品を売り、お金を稼ぐことを学ぶ子どもたち / 4. 夢中で製造する子どもたちにアドバイスする小林さん

「触れ合いながら体験を伝える」

2月9日㊦、伊達東小学校と月舘学園小学校の6年生を対象に、モデル・タレントで伊達なふるさと大使の小林アリスさんがスペシャル授業を行いました。クラスを班分けし、製品を製造して貿易で外貨を稼ぐ「貿易ゲーム」に挑戦です。資源や財力にばらつきを持たせた状態で始まるこのゲームは、世界の縮図そのもの。国際看護師の資格を持ち、国際支援活動を行う小林さんは、実体験を交えながら世界情勢や国々の貧富の差を子どもたちに伝え、「改めてふるさと伊達市の良さを感じてほしい」と呼びかけました。子どもたちは、ゲームを通して国際社会への関心を高めているようでした。



市長コラム 第51回

「みんな違って、みんないい。」

須田博行

伊達市立志式が、1月31日㊦、保原体育館で行われました。立志とは文字通り「志を立てる」ということで昔の元服げんぷくにあたります。「元服」とは、子どもの成人を祝う社会的に重要な儀式でした。数え年で15歳の時にお祝いをしたことに由来し、伊達市では中学2年生のこの時期に毎年行っています。

中学2年生は3年生への進級を控え、自分の進路や生き方を考える大切な節目の時期です。自分自身の将来の夢や志を真剣に考え、その達成に向けて決意を新たにする良い機会だと思っています。

式典のあとには、文化庁の巡回公演事業として、プロのダンスカンパニー「ナチュラルダンスシアトル」による芸術鑑賞会が行われました。公演作品の「さーかす」は、自分のやりたいことが見つからず毎日をぐだぐだ過ごしていた主人公「一郎」の前に昭和のサカス団が現れます。戦後、今より

ずっと貧しかった時代を一生懸命生きたサカス団が、現代っ子一郎の心に生きる力を吹き込む物語です。作品のテーマは「みんな違って、みんないい」。伊達市では初の公演で、音楽とダンスだけで物語を表現していくところがすごいと思いました。

感じ方は人それぞれですが、『人と比べて何の特技もないと思っていた一郎が、個性豊かな人たちと出会う中で、自分がやれることを見つけ出し、それが一郎に生きる力を与えたのだ』と私なりに感じました。

みんなそれぞれにできることは違います。人は「みんな違う」何かを持っていて、それは「みんないい」もののなのです。「みんな違って当たり前」という多様性を認めることの大切さが、真剣に舞台を見つめる15歳の目には映っていました。そして特にこの日は「一人ひとりが自分の色で輝いていた」と強く感じました。